

1. 流域の概要

湧別川は、その源を北海道紋別郡遠軽町の天狗岳（標高 1,553m）に発し、山間部の遠軽町白滝を流れ、丸瀬布で武利川が合流し、遠軽市街において平野部に出て生田原川を合わせ、湧別町においてオホーツク海に注ぐ、幹川流路延長 87km、流域面積 1,480km² の一級河川である。

湧別川の流域は、遠軽町、上湧別町、湧別町の 3 町からなり、オホーツク圏における社会・経済・文化の基盤をなしている。流域の土地利用は、山林等が約 75%、原野・牧場等が約 14%、耕地は畑作が中心で約 10%、宅地等の市街地が約 1%となっており、流域内は森林資源などに恵まれている。流域内は、酪農を中心とした農業、水産業が盛んで、特に河口の湧別町は全国有数のホタテの産地となっている。

陸上交通としては、JR石北本線、国道 238 号、242 号、333 号等の基幹交通施設に加え、旭川紋別自動車道が整備中であり、オホーツク圏と道北・道央圏を結ぶ物資輸送や観光旅客輸送に大きな役割を果たし、交通の要衝となっている。

さらに、河岸にはヤチダモ、ハルニレ等の河畔林が豊かに繁茂しており、サケ、カラフトマス等が遡上し、これらの増殖河川として重要な位置を占める他、ニジマス、サクラマス（ヤマメ）等の溪流釣りに多くの人が訪れるなど、豊かな自然環境に恵まれている。このように、本水系の治水・利水・環境についての意義は極めて大きい。

※遠軽町、生田原町、丸瀬布町、白滝村は平成 17 年 10 月 1 日に遠軽町として市町村合併した。

流域の地形は、山地から海岸までの距離が比較的短く、傾斜地を直流する急流河川に属しており、山間部を溪流の状態で貫流し、中流部の遠軽市街部付近から平野が広がっている。

流域の地質は、上流部は第四紀洪積世の安山岩質溶岩等の火山岩類が分布し、中流部には火山性の岩石を主体とした新第三系が広く分布し、下流部は、砂岩・頁岩の互層から成る。生田原川の合流点付近より下流の河川沿いには、砂礫層からなる河岸段丘が発達している。海岸平野には、礫・砂・粘土の他、一部で泥炭も見られる。

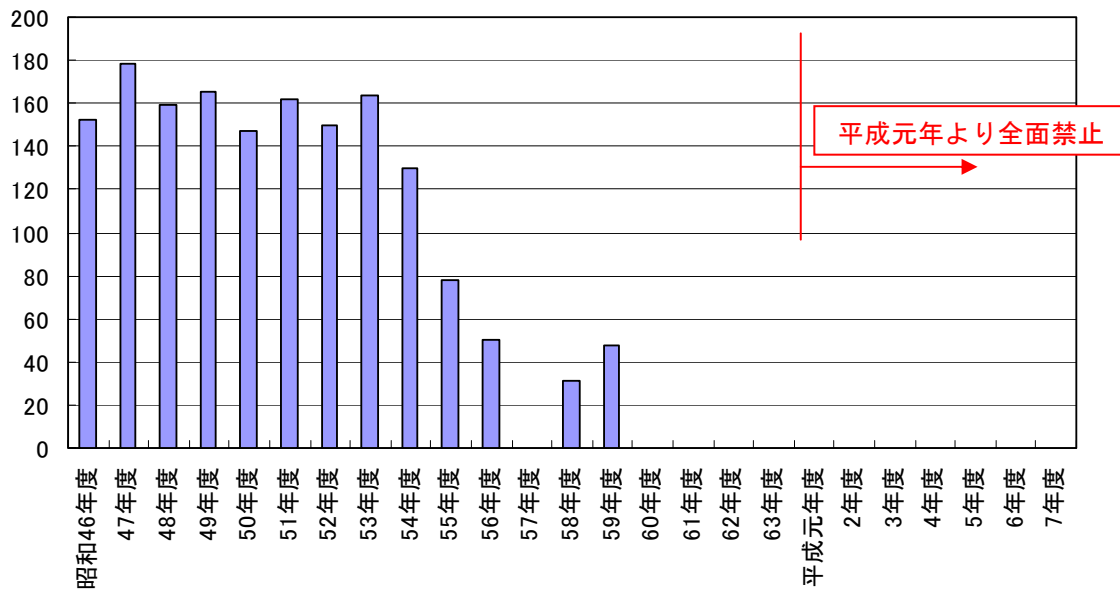
流域の気候は、オホーツク海側の気候区分に属し、平均年間降水量は約 800mm 程度であり、全国でもっとも降水量が少ない地域である。また、オホーツク海は流水が接岸する海であり、気温は流水接岸期の 2 月に最も低くなる。

2. 河床変動の状況

2-1 砂利採取の状況

湧別川水系においては、昭和 40～50 年代にかけて砂利採取が行なわれてきたが、平成元年より全面禁止となっている。最も盛んだったのは昭和 40～50 年代前半までであり、このころは年間 160 千 m^3 の砂利が採取されていた。

砂利採取量
(千 m^3)



2-2 河床変動の縦断的变化

既往 40 年間(昭和 42 年～平成 18 年)の低水路平均河床高は、昭和 42 年～昭和 60 年にかけて河床低下が顕著となっている。当時、前述の砂利採取、堤防防護や低水路を固定化するための護岸工事、流下能力確保を目的とした河道掘削が行なわれており、これらが河床低下の要因と考えられる。その後は、護岸工事や水制工設置の工事は継続して行なわれてきたが、昭和 40～50 年代に見られるような河床低下は収まってきている。近年、平成 10 年や平成 18 年洪水など、既往最大及びそれにほぼ同規模の洪水が頻発していることによる、洗掘(上流)及び堆積(中下流)が発生している。

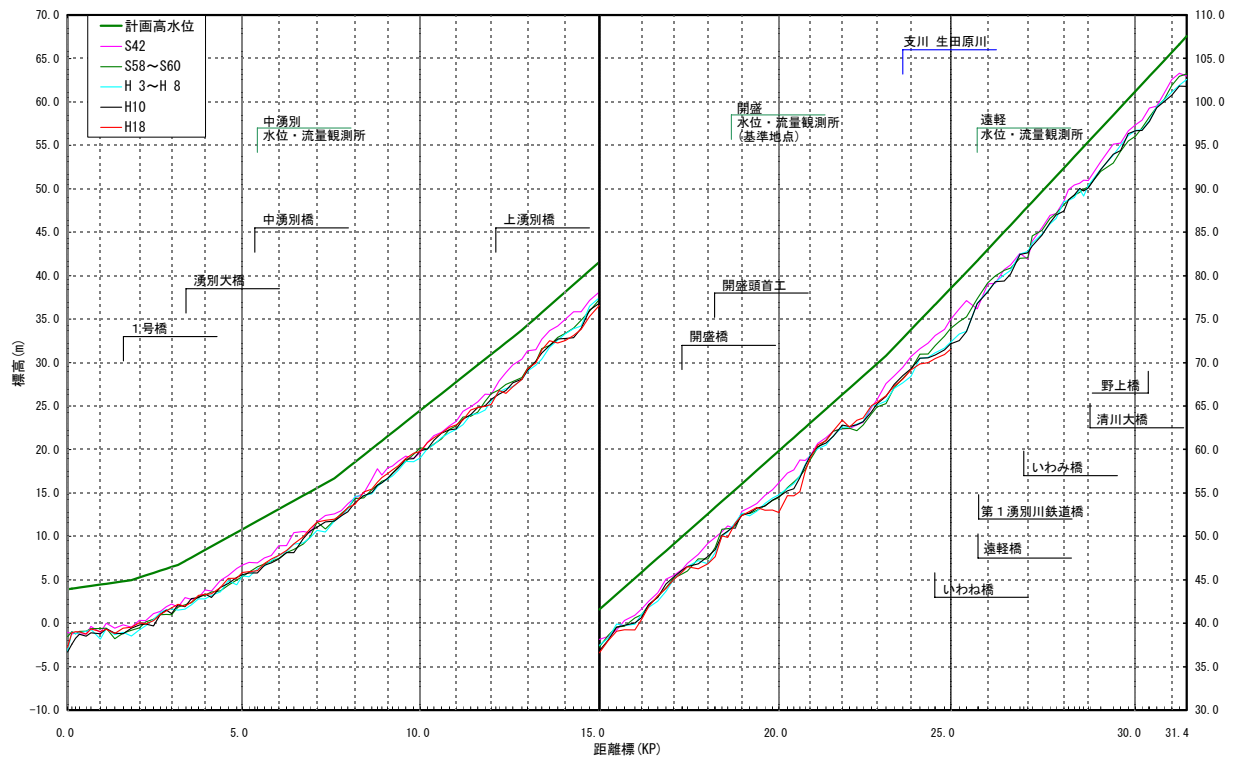


図 2-1 低水路平均河床高縦断図

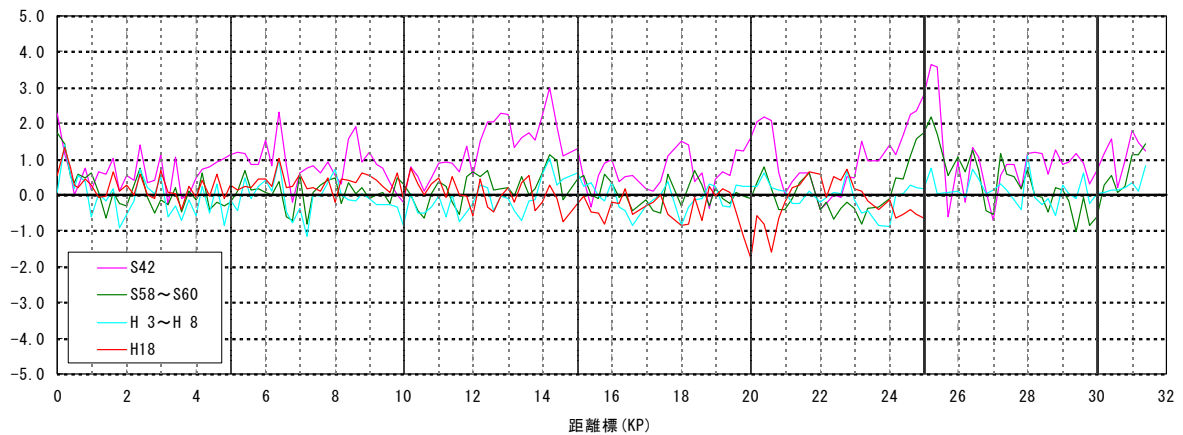


図 2-2 河床変動縦断図 (平成 10 年基準)

2-3 横断形状の変化

過去からの横断の経年変化を見ると、9k600 付近は複列砂州河道となっており、広い低水路内の河床は、比較的活発に変化している。高水敷は狭く、堤防防護のための低水護岸や水制工が敷設されている。

上流の 24k800 付近は、過去に護岸により低水路を固定化するとともに河道掘削を実施している。同区間は、遠軽市街地部であり高水敷はグラウンド等として利用されている。工事実施後には、平成 10 年や平成 18 年など、既往最大及びそれと同規模の洪水が原因と考えられる河床洗掘が発生している。

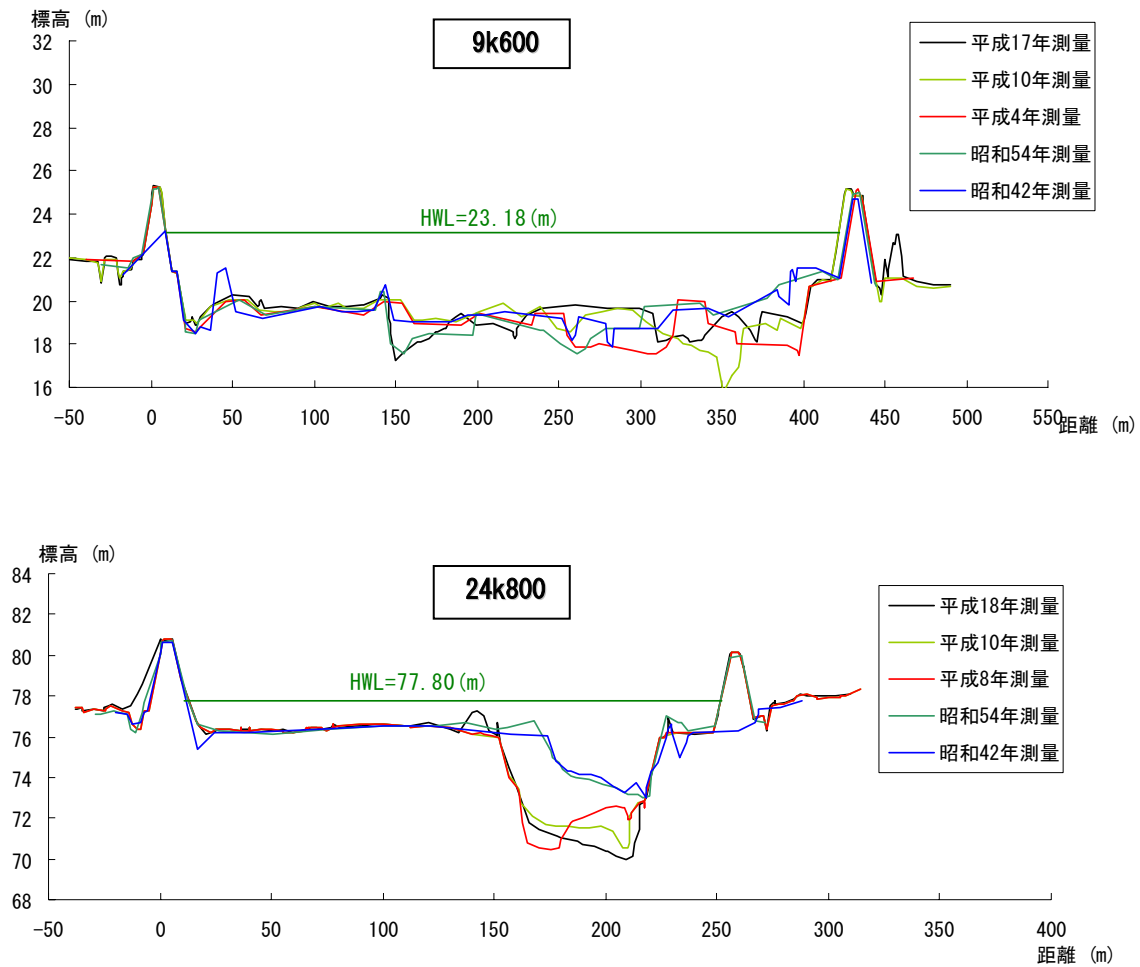


図 2-4 経年変化横断面図

3. 河口部の状況

河口部は、昭和 37 年より導流堤の建設が開始され、現在では両岸に設置されている。

湧別川河口の汀線は、昭和 22 年から現在まで大きな変化は見られない。

河口部は、導流堤があることで砂州の発達はなく、河口閉塞も生じていない。

現状で洪水の流下に支障はないが、引き続きモニタリングを継続する。

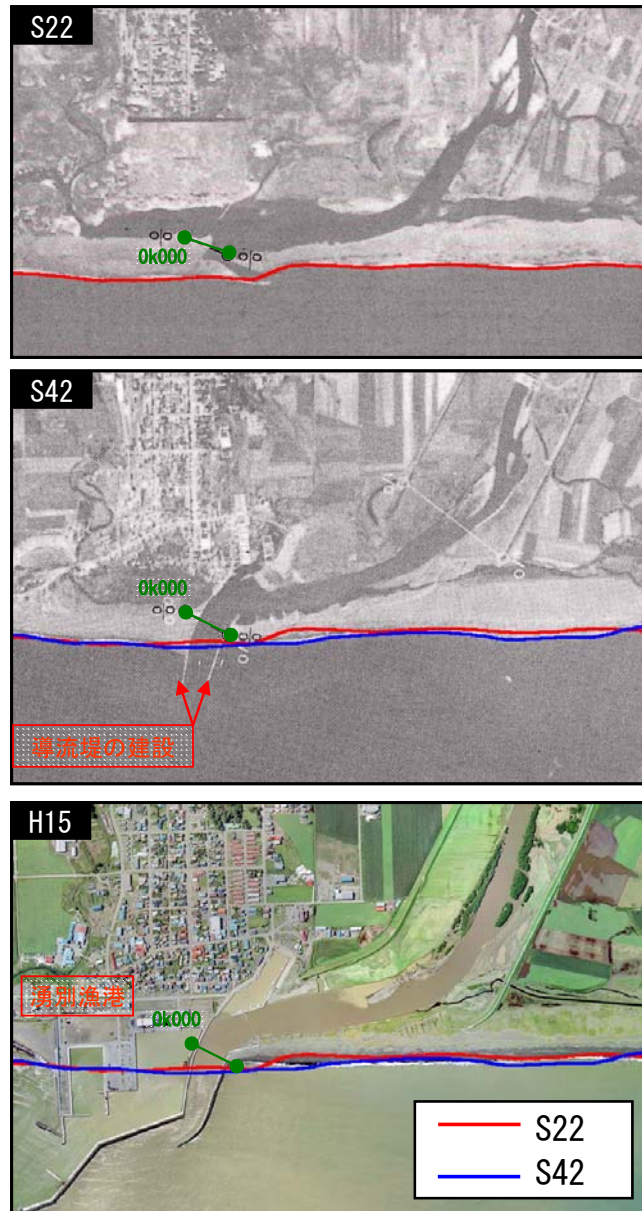


図 3-1 河口部(海浜部)の経年変化状況

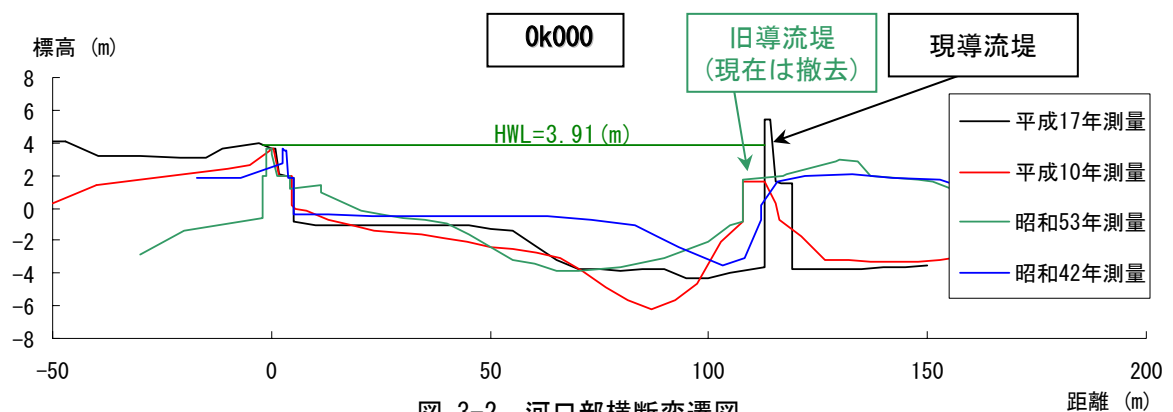


図 3-2 河口部横断変遷図

4. まとめ

河床変動の状況、砂利採取、横断経年変化の状況等を検討した結果、昭和 40～60 年にかけて、全川の顕著な河床低下傾向が見られたが、近年はその傾向は収まってきている。

河口部の状況については、導流堤により河口砂州は形成されておらず、河口閉塞も発生していない。

今後、流下能力が不足する区間において河道掘削を進めていくことから、工事实施の際には安定した河道の維持に努める。また、上流から海岸までの総合的な土砂管理の観点から、流域における土砂移動に関する調査・研究を進めていくとともに、引き続き河床の変動状況や河床材料の変化状況、各種水理データの収集等のモニタリングに努め、適切な河道管理へフィードバックしていく。